

J O F I 東京通信

第1号 平成25年3月3日発行
<http://www.jofi-tokyo.org/>

東京都釣りインストラクター連絡機構会報誌

目次

会報誌発刊に向けて	遠藤 実会長……	1
魚との出会い	國信 悠久………	2
マコガレイ！！	林 正………	2
故郷の川	松村 登志雄……	3
フライ・フィッシングに手を染めたきっかけ	鈴木 伸一………	4
第6回ふるさと清掃運動会参加報告	阿部 敏明………	4
釣りガイド(内水面)のライセンス制について	新井 勝之………	6
釣り人の立場から遊漁を考える(当世遊漁事情)	松本 國男………	6
船釣り初心者指導奮戦記	小林 賢吾………	9
2012年度活動実績………		11
J O F I 東京夕留会(勉強会)を発足………		11
お宝コーナー………		12

日本でも古くから多くの文人墨客が釣りに親しんでいたようですが、それだけ釣りの奥深さに多くの人が魅力を感じていたと云うことでしょう。

その後、上京して数年後、大物釣りクラブに入り、伊豆諸島、ベヨネーズ、スミス、小笠原や、山口県萩市から八里ヶ瀬へクロマグロ釣りにも出かけました。然し今は気の合った仲間と、まさに「老人と海」を楽しんでおります。釣りのお陰で多くの友人に恵まれたことは、我が人生の宝と思っています。

平成4年水産庁等の支援を受け、公認釣りインストラクター制度がスタートし、初年度104名、その後全国で年度ごとに受講者は増え、4年目には321名の方が受験し登録されました。平成9年からはマスター(上級釣り指導者)制度も設けられました。この頃から地域での組織作りが始まり、東京エリアでも平成10年、都内4支部、西東京支部と5ブロックに分かれて活動が始まり、平成12年には支部から連絡機構に呼称を統一。平成19年、幾度かの話し合いを持ち、西東京を除く都内4機構が統合し、東京都釣りインストラクター連絡機構(略称・JOFI 東京)として新たにスタートしました。

初代会長には「東京都城北連絡機構」会長、勝島諒典氏が就任。副会長兼事務局長を遠藤が務めることになり、各役員の方や会員各位の協力を得ながら、さまざまな事業に取り組んでまいりました。平成23年より勝島会長の後を継ぎ、遠藤が二代目会長として現在にいたっております。

会報誌発刊に向けて

遠藤 実 会長

昭和9年、長崎県佐世保市で生を受け、戦中戦後を生きてきました。西海国立公園九十九島や五島列島など、長崎県は日本一島の多さで知られています。そのせいか子供のころから釣りが好きで、カワハギやメジナなどの釣りに夢中でした。

それでも本格的に釣りに興味を持ったのは、20歳の時アメリカの作家アーネスト・ヘミングウェイが、「老人と海」でノーベル文学賞を受賞し、映画化されました。映画館には幾度も足を運びました。

日本の高齢化も深刻な問題ですが、釣り人口も年々減少し、平成13年に年間4,800万人とも云われていたのが、昨年初めのレジャー白書では960万と発表されました。本来日本の食文化であつた魚の需要も減少し、ついに肉食に逆転されました。特に子供達の魚離れが顕著です。魚にはDHAやEPAなど健康の源と言われる成分が多く含まれています。毎年開催の「親子釣り教室」等での、子供達の目の輝きと笑顔を増やすのも、我々釣りインストラクターの使命と思っています。

阿部敏明環境部長のお骨折りで、浜松町「港区立エコプラザ」を毎月第二土曜日に利用できます。勉強会やトーク等皆さんと釣りに関する様々な会合

を行っていきたいと思います。これまで行ってきた釣り場清掃、釣り指導、環境保全等と合わせ、我々に出来ることを考えて行きましょう。

先の役員会において、後一期の会長を推薦されました。若い会員の方にも積極的にご参加頂き、新しい感覚を提供していただければと思います。尚今回の会報発行に関し、鈴木広報部長他役員各位のご協力に感謝申し上げます。今後とも皆様方のご協力の程よろしくお願い致します。

魚との出会い

國信 悠久

今、記憶に残っている魚との初めての出会いは確か、私が五歳の時、九州佐賀の田舎で家の近くにあった、小さな浅い池に入り、手で捕まえた10cm位の「ドンコ」(純淡水生の魚、ハゼ類)でした。

戦争中で食べられる物も少なく、捕った魚は貴重な蛋白源で、その日の夕方鍋で煮て食べたことを覚えています。

佐賀平野の小城地方は昔から「魚を釣る」という風習はなく、魚は川や池、掘割で手で捕まえるか、竹で編んだ「ソウケ」(農業用や家庭用のザル)・網で捕っていて、したがって当時は釣竿や釣り針はあまりありませんでした。

入学した国民学校が小学校に変わるころには学校から帰ると近くの川や沼でドジョウやフナ、コイ、カニ、それにたまにはウナギを捕まえて一日中遊んでいました。

私が釣竿に餌をつけて初めて釣りをしたのは学生の時、学校の目の前の金沢八景の平潟湾でゴカイを餌に、大型のハゼを十五、六匹釣り、家で天ぷらにして頂いたことを覚えています。

金沢八景は今でこそ八景島シーパラダイス等が出来てすっかり変わりましたが、金沢漁港も昔は小柴のひなびた漁村で、幾らでもハゼが釣れていたことを記憶しています。

今から四十年前、私が本格的に川釣りを始めたきっかけは、昭和四十六年に転勤で埼玉県桶川市に住むことになり、そこで少し暇が出来て、趣味として始めたことでした。

晩秋の休日に三歳の長男を自転車に乗せて本田桶川飛行場のそばの飛行場沼(旧荒川の蛇行の跡)

へ行き、そこで初めて五cm位のフナを一匹釣ったのが最初の釣果でした。当時は荒川の中流も清流で、ヤマベやハヤ(地元ではクキと呼ぶ)がよく釣れ、周辺の沼ではナマズや雷魚が釣れました。

マコガレイ！！

林 正

何時頃から釣れなくなったのであろう！



釣行の多くは、キス、ハゼ、カレイなど、当時の釣果は連日50~80枚(匹)と、私も何度か竿頭で新聞の釣果欄に掲載されました。マコガレイが近年釣れなく原因は！！ JOFI勉強会に提案したい。他の魚種は？

また、かつて子供達の趣味は魚釣りが上位に挙がっていたものだが、近年は釣り人口が激減している。釣り具店内には少年の姿を殆ど見かけない。自然を相手にした遊びが、今は各種ゲーム、個人で遊ぶ機種が増えたのも原因の一つか？ 釣り人口を増やすためには！！ JOFI勉強会に提案したい。



故郷の川

松村 登志雄

私が生まれたのは、富山県射水市大門町（当時射水郡大門町）の、庄川と和田川の合流地点のすぐ傍で、庄川で言えば中流域でも下流に近い平野部。

庄川は砂利底で鮎や鮭の遡上する川、そして和田川は川藻の繁茂する泥底で、鮎や鯉も棲む川だ。兄に連れられて釣りを始めたのは5歳頃。庄川での釣りの主な対象魚はウグイ（ハヤ）で、子供たちがトバシ釣りと呼んでいた、3～5本の延べ竿に道糸とハリを付けただけの、至ってシンプルな道具立てでの釣り。

竿は、七夕の後に川に流される七夕飾りの竹を拾い、枝を落とし、穂先を適当な硬さの所で切った物。道糸は、母親の裁縫用の木綿糸。ハリは釣具屋で買った、20センチ位のテグスが付いた袖バリ。

オモリが一切付いていない仕掛けなので、子供には非常に扱い難いのだが、それには理由がある。潰さないように捕まえたエサのハエやクモをハリに刺し、それを魚の居そうな流れを目がけて飛ばし、そのまま水面に浮かべて流すという、ドライフライと同じ釣り方をするため、オモリが有ってはいけないのだ。エサがハエだけに、まさにフライ釣り？

釣り方の呼び名としては、エサだけをポイントに飛ばすことから、トバシ釣りとなったのだろう。水面を流れるエサを見つけたウグイが、水面まで浮かんで来て、パクリとやった瞬間にアワセを入れる。

アワセが遅れると、違和感を覚えたウグイが、エサを吐き出してしまうことが多い。そのため、あまり糸フケを出さないように、かつ、エサが糸に引っ張られて不自然に流れないように、糸フケを最小限にしておく必要もあるという、結構テクニカルでシビアな釣りだったので、子供ながらに夢中に竿を振っていた。

私のやっていた変わった釣り方としては、ウナギの穴釣りがある。穴釣り自体は一般的にある釣り方だが、私の穴釣りは普通と違っている。私の子供時代には、川で泳ぐことは普通のことだった。

私の夏休み期間中の一日の過ごし方は、早朝のマズメ時にアユを釣り（ドブ釣り）、朝御飯の後、日が高くなるのを待って泳ぎに行くが、その時には手にヤスを持って魚を追いかける。昼御飯と昼寝の後、再度ヤスを持って泳ぎに出て、夕マズメにはまたアユ釣りをする。

こんな調子だから、夏休み終盤はいつも宿題との格闘に陥る、勉強嫌いの子供だった。ウナギの穴釣りは泳ぎながらの釣りで、潜りながら大きな石の下や護岸工事の構造物の下などにできるウナギのいそうな穴を探し、見つかったらまずエサの確保をする。

近くに泳いでいるウグイの群れを追いかけると、必ず小石の下に潜って隠れるものがあるから、それを手で捕まえればそれでOKだ。それを、兄の持っていたインダイバリとワイアハリスで作った仕掛けに付け、見つけた穴の中に差し込む。

貪欲なウナギは、居さえすれば一発で食ってくる。後は、ウナギとの水中での綱引きとなるが、普通の穴釣りなら上方向に引くことになり、ウナギを穴から引きずり出すのに苦労しなくてはならないが、こちらは潜って横方向に引くことができるので、穴の奥がよほど複雑でない限り引きずり出すことができる。

また、ハリスがワイアなので、根擦れにも耐えられるし、一度で引き出せない場合でも、ハリスにある程度の長ささえ有れば、一度呼吸を整えて潜り直しても、再度綱引きをすることが可能だ。

トバシ釣りや穴釣りは庄川での釣り方だが、和田川では棒浮木を付けた浮木釣りで、エサはミミズやハチの子。そこで釣れる魚はウグイ、フナ、タナゴ、ヤマベ、ウナギなどいろいろで、カニやテナガエビなども見ることもできた。

そんな豊かな生態系を誇った和田川だが、今では両岸が完全にコンクリートと化し、殆ど魚影を確認できない川になってしまっている。治水の面では成果があったのだろうが、生態系は破壊されてしまっている。

専門家ではない私の勝手な思い込みだが、雑木や雑草の繁茂する川岸に囲まれ、川底に川藻が揺れるような環境が有ってこそ、自然な生態系が維持される。

造成工事にも維持にも費用は掛かるだろうが、治水と環境の両立ができる工事をしてこそ、日本が誇るべき良好な自然環境を、子孫に残すことができるのではないだろうか。

フライ・フィッシングに手を染めたきっかけ

鈴木 伸一

僕がフライ・フィッシングを始めたきっかけの第一は、中学生時代、色々な釣りが知りたくて購入した書籍に目を引く記述があったことに始まります。

その当時は釣りに関した書籍は少なく、やっと手に入れた大泉書店発行の「新釣百科」と「魚の釣り方」のいずれにも湯川のマス釣りの、それもドライ・フライ・フィッシングに関しての記述があったこと、また、小学生時代の林間学校では、湯の湖で大きなニジマスが釣れたところを目の当たりにしていたこともあり、子供ながらフライ・フィッシングへの興味が目覚め始めた時期といえます。

僕はなぜか誰もがやるようなことにはあまり興味が持てず、他人がやらないことに関心が向く性格です。しかしながら、中学生にとって日光はあまりにも遠く、釣り場としての現実性は帯びていませんでした。

中学生になって、初めてウェーダーを買ってもらおうと、伯父に連れられ東丹沢で溪流釣りを覚えるようになりました。そのころの中津川や早戸川はその支流も含めてヤマメの宝庫であったばかりでなく、マス釣り場から落ちてきたニジマスがワイルドに育ち、餌釣りの仕掛けに掛かると、走るはジャンプするはで、その当時の餌釣り用のタックルではそう易々とは取り込むことはできず、子供ながらにいつかはフライ・フィッシングでと心に思っていました。

高校に通うようになると行動範囲も広くなり、単独でも電車やバスを乗り継いで南秋川、多摩川の支流である海沢、名栗川の有馬谷などをホームグラウンドとして、餌釣りの合間にテンカラ（和式毛鉤釣り）をやるようになりました。でも、そのころは例え毛鉤で釣れたとしてもまぐれのようなもので、あくまでも餌釣り主体の釣りでした。

暫くしてルアーを知るようになり、溪流魚の大物に対してはルアーが最強の武器であると思うようになり、事実、密かにいい思いをさせてもらった時期もありました。そのころはルアー釣りをやる人はほとんどおらず、ルアーを手に入れたくても、東京では京橋の「つるや」くらいにしか置いてないような時代でした。

そして、1966年の暮れに出版された西園寺公一著「釣魚迷」に触発され、大学に入った最初の夏休みに、気心の知れた山仲間との北海道への釣りの

旅が今まで「釣れない釣り」であった毛鉤釣りが「釣れる釣り」フライ・フィッシングへの一大転機となりました。

その後、社会人となった翌年であったろうか？同僚から聞きつけた野反湖で、バックング・ラインを40mも50mも引き出し、はるか沖合でジャンプを繰り返す野生化した大型ニジマスとのスリリングなやり取りを経験し、釣りのテクニックと言うよりはむしろメンタル的側面で色々のご指導いただいた Japan Fly Casting Club の初代会長であられた故原源太郎先生との出会いなどを通して、僕のフライ・フィッシングは「人生の友」へと発展していくのでした。



Snake tagged French Partridge May Fly

tag : Japanese Rat Snake skin

また、フライ・フィッシングは自然との関わりも多く、元々昆虫や植物、鳥や動物などが好きだった僕にとっては、そういった意味でも馴染みやすい釣りであったのかもしれませんが。野鳥の声に耳を傾け、川辺に咲く花を美しいと感じ、夜空を彩る星座や天の川に感動できる心を大切に、今後も一人でも多くの方々に釣りの楽しさを伝えていければと願っております。

第6回ふるさと清掃運動会参加報告

阿部 敏明

2012年10月14日(日) 荒川、小松川橋付近で千名の参加者によって行われました。早いもので第1回は私に実行委員長からこの企画の相談がされたので若洲で実施はどうかと提案したら即決

となりました、幸運にも当日は開催前の台風の効果でゴミが大量に打ち上げられて多くの参加者が汗を流し充実感を体験できたと好評でした。以後順調に継続中です。

当会は昨年に続き今年も会長を頭に13名が参加しました。また、JOFI東京も協力団体に加入したので、何かPRできる独自の展示がないものかと考えて行ったのが下記の(1)～(3)のテーマです。

(1) 荒川の魚達を水槽にて展示

鯉、鮒、鮠、たなご、クチボソ、はぜ、もろこ、ヨシノボリ、ヌマチチブ、手長えび、ザリガニ、ヤマトヌマエビ、黒弁慶カニ、もくずカニ 鱈、……。荒川に生息している生き物を直接見せることにより、大勢の参加者が興味を示してくれるとともに、我々も大いに質問攻め(特に赤いどじょう)に合い、お互い有意義な体験となったのではないのでしょうか? 川をきれいにすることで沢山の魚が住めるという意識が芽生え、魚を好きになってもらうことがなによりも大切な基本であると思います。



(2) 外来魚の写真展示

無作為な放流によるコイやフナなどの亜種間交雑なども見られるようになりましたが、やはり、生態系の乱れの原因の第一は外来種によるものではないのでしょうか? 網を仕掛けるとミドリカメ、ブルーギルが大量にかかりますが、多分元凶はペットとして飼われていたのが川や沼に捨てられたのではないかと思います?

今の子供達はカブトムシや金魚を飼いたいけれど、両親特に母親に反対される家庭が大変多いようです。生き物に接することで(動物園、水族館は知識を得ることができるが情がわからない)子供の成長

には欠かせない様々なことが学べる真の教育と思います。

(3) ゴミに混ざる危険な漁具と被害を受けた鳥類の写真展示

折れた竿、ハンドルのないリール、絡まった数種の道糸、壊れたルアーやエギ、鉛、ウキやカゴ、電気ウキと電池、天秤、錆びた針、絡んだサビキ仕掛け、鈴、網、帽子や手袋、竿ケース、くつ、ビニールバケツ、等等。

釣針は人間でも鳥類でも非常に危険であり特に錆びたものは雑菌の巣である故慎重に扱わなければなりません。道糸は鳥類の自由を奪い死に至らしめます(ふくろう、かもめ、はと等)。楽しい釣りをしていくには正しい認識を持ってないといけません。それは個々の釣り具に責任を持って管理しなければならないし、また流失や落下は充分注意をして万一の場合は回収に努力することです。これらをJOFI東京の面々から来場者に対し的確に解説していただきました。

(4) 清掃内容

当会は桃色組、水上班、全員長靴履いて水際清掃主体でこれは大変珍しい独自の作業でした。清掃を始めると上げ潮に入り、特に意外だったのはビニール袋に砂泥が満タンに入ってあちこちに沈んでいたこと、また、この河川一帯は岸から7～8mは水深が70cmと一定していたことでした。

余興としていたボートに乗船しての投網実演予定は(今の時期大型のはぜが期待できた)潮回りが悪く残念ながら中止せざるを得ませんでした。それでも、最後の最後に子供達を順番にボートに乗せることが出来、10人上手に呼吸を合わせ櫓を漕ぎました。



また、この付近は石の下に多くの荒川名物黒弁慶カニが生息していることも確認できました。

釣りガイド(内水面)のライセンス制について

新井 勝之

今年、北海道に於いて、釣りガイドを依頼しての釣行をした時に感じた事を書きます。

私はそれまでガイドを頼んでまで釣りをする気にはなりません。何故なら、釣り場の開発は自分でする事が、上達の手段であり、良い釣り場を見つけた時の喜びも味わうことが出来ます。その上、ガイド料金も掛かるし、必ずとも良い釣果を上げられるかは疑問だし、なおさら頼む気になりませんでした。

しかし、友人の知り合いのガイドに会い、経験してみるのも良いと思い、頼む事にしました。釣りに行くの入渓地点の選定から、川での歩行に安全に配慮し、釣れそうなポイントを的確に教え、釣り方(道内での釣り方)まで教えてくれます。おかげで、安全で楽しく、有意義な釣りをしました。北海道と東北の一部に「釣りガイド」が居ますが、自称「ガイド」であり、何を信用して頼むかは難しいですね！



2012年7月道東にて、52センチの岩魚

初めての場所でも こんな大物が釣れて楽しむ事が出来ますよ!(^^)!

昨今、山岳ガイドが問題視される事故が有りましたが 北海道では道庁がライセンスを発行しています、山岳ほど 危険度を少ないように思えますが、

溪流での釣りに於いては危険度は変わらないと思います。釣りが上手でも、自然環境の変化に対応して安全への確保や事故が起きた時の対応等の知識がなければガイドとして不適切だと思います。

ガイドのライセンス制は、安全に釣りを楽しむ観点からも必要だし、ガイドを付ける事で、むやみに自然を荒らさない事にも繋がると思います。

釣り人の立場から遊漁を考える(当世遊漁事情)

松本 國男

本日は快晴の風で日和にも恵まれた。楽しみにしていた月一回の釣行である。

乗合に仲間四人と期待に胸を膨らませて投入を続けるがさっぱりあたりが来ない。さきほどより船頭は魚探をしきりに見てポイント近くの旋回を繰り返している。まあ致し方あるまい、この広い海原を船上で満喫すれば良いと日真名氏は自らに言い聞かせるのであった。

東京湾口のある一日の釣行であった。

せめて親子4名が夕食の食卓を囲める釣果があれば楽しいかと念ずるのであった。このところ会社の給料も成果や能力主義とやらで昇給も見込めず、釣りに使える小遣いの確保も限られている。いつも教育費がと愚痴る女房の渋い顔も浮かんでくる。

あつ当たりだ、滅多に来ないのでビックリ合わせで又逃がしてしまった。

しかし遊漁乗船料と同程度の出費で、新鮮な高級魚を築地場外市場で購入できて家族全員で賞味出来るという女房殿の小言にも一理あると思う日真名氏であった。

それにしても今日の船頭の指示棚のアナウンスも不明瞭で聞き辛い、同乗の仲間にかめながらの投入を繰り返す。先月に乗った船宿の船頭は親切であったなと思いつつ、その違い等はどこから生まれてくるものか日真名氏は船上で考えた。

同行4名と“釣り人の立場から見た遊漁、つまり当世遊漁事情”を船上放談で順不同という形でまとめてみました。

船宿；

早朝に到着、まず接客の態度でその日一日の気分が左右されると言っても過言ではない。はじめての船宿などは不案内なので、特に親切な対応が欲しい。

客商売をしているという感覚に乏しい船宿がある。受付すらないところもある。

どんなに早く到着しても釣り座の札の良いところは占拠され、はずされているところがある。

船宿の多くはもっぱら女将さんの愛嬌のみで凌いでいるところが多い。

大物顔した常連客がふんぞり返っているような船宿には二度と来たいとは思わない。

一杯船主から会社組織に近い大型経営まで千差万別で、遊漁の観点で両者を同一視して議論出来ないところにこの問題の難しさがある。良いところと悪いところの差も大きい。規模の大小に拘わらず客を大切にしようという姿勢がある船宿にはつい足が向いてしまう。

船宿の仕掛け、錘とかは量販店のものより特徴があり安価であるべきと思うが案に相違してそうでもない事がある。乗船直前で他に選択肢もなく必要なのでつい購入してしまう。

船；

掃除、清掃が行き届いていない船がある。臭いがする船もある。釣り座付近までピカピカに磨き上げて欲しいとまで言わないが、兎角船に乗るとウェアから持ち物まで汚れることが多い。一番厄介なのは重油等の油で汚れる事だ。

また各船の構造上現状では致し方ないかもしれないが竿置き（ロッドキーパー）の取り付け位置が異なる。取り付けやすいように規格の統一が出来ないものか。

船上では釣り人の船内の移動のスペースも欲しい。釣り座もろくにない釣り船もある。トイレについてももう少し人間的な設備をして欲しい。剥き出しのままの船もある。

釣りを終えて入港後、接岸した際に乗客の事より船の面倒を先にする船頭が居る。重いクレーンの岸壁までの運搬やアフターキャッチ、つまり釣り上げた魚の保存の方法とか氷の手配とかを小まめにやってくれる船は大変うれしいです。また一言でも良いから本日の潮況等はどうかであったかも説明して欲しい。

船頭（船長）；

全ての釣り人は船頭の一言も漏らさないように釣り座から注意を払っている。船頭間の無線会話に夢中になりポイントより明らかにずれたのに放置のままの船頭も居る。指示が明確でない人が多い。またひどい船頭にあたると客に怒鳴り散らす人も居る。

場所を移動するにせよ、“反応が無くなった”とか、“ポイントがずれたから潮回り”するとかの説明が欲しい。投入した途端の“上げて”だけはがっかりすると共に“何だよ”という気持ちになる。大きなポイント移動の時も説明が欲しい。20～30分説明のないまま海上を猛スピードでの移動は釣り人にとって不安である。

要は乗客である釣り人と船頭の間信頼関係を構築するように努力して欲しい。未だにタバコの吸殻をはじめ、船中のゴミを海に投げ捨てる船頭も居るのには驚きだ。

有名船宿の仕立船で、注文件数を受け過ぎたのか、孫請負くらしいの船を回され船頭にもやる気がなく、又仕立ての意味もあまり理解していない様に見受けられるのに遭遇したことがある。

朝一番釣り人に対して挨拶の一つもない船頭が多い。名前も判らない奇妙な世界である。

釣り人（乗客）；

昨今の社会情勢を反映してか、釣り人同士の挨拶が少なくなったように思える。かつて両隣はもちろん船の裏、表の人達にもきちんと挨拶を交わしていた。

船頭の指示を守らない釣り人も居て、釣り人側に問題がある時もある。技量にもよるが潮が早いときにやたらに幹糸を繰り出しお祭りを連発してしまう人も居る。

乗船直後よりアルコール類を飲み始めて、酩酊状態で周囲に迷惑をかけている人も居る。本人だけが気分良くて周囲が迷惑していることに案外気が付いていない。目的の釣りものが釣れないときに、すぐに飽きてしまい、しきりに船頭に場所の移動や釣りもの変更を迫る釣り師も居る。

オープンエアーといえどヘビィースモーカーの風下で紫煙にいやな思いをする時がある。

お祭りで困っている時に中乗りさんが居て、瞬時に解いてくれるのは有り難い。ある船ではお祭りを

解かずに高級幹糸を釣り人にバッサリ切断された事がある。

初心者歓迎とあるが船上で親切に指導を受けているのをあまり眼にしたことがない。竿受けや電源の装備は船側で、釣り人の持物を極力減らす工夫が欲しい。

釣りもの；

日本人は魚の取り扱いについては世界一と言え、やはりアフターキャッチつまり釣り上げた魚の始末（取り扱い等）について魚種により親切に教えて欲しい。

船によっては海水の配水装置が各釣り座にあり、魚の鮮度が保てるのは良いことだ。魚の締め方については関西の方が繊細であるように思える。

海外での釣り；

米西海岸での例だが一般的に言って船も大型で、ちょっとした軽食等は船内で買える。船尾の最善の場所で獲物をゲットすれば船長の指示で、次の人にその場所を譲るのがルールとなっている。乗客全員がチャンスに恵まれるという配慮だ。殆どがスタンディングフアイトであるから各人の位置も変わりやすいこともある。

また、釣り上げた魚は湾内の水域に入る迄にデッキハンド（中乗りさん）が有料で捌いてくれる。魚のアラは海に返している。湾内でのアラの投棄は厳禁できちんと守っている。

魚種により匹数の制限、サイズの制限を設けている。船の甲板にはメジャーがあり、達しない魚は即リリースが基本ルールとなっている。小さい魚体の保護のために釣り上がる前に判断して極力船縁でリリースを行っている。

余興としては、乗船時に大物賞レースに加わるか決めて、天秤計りで船中一番の重量を各人が競い、優勝者に船中で集まった現金を賞として与えるという事もしている。いずれにせよ釣りをスポーツとして捕らえて楽しもうという雰囲気があり、船宿側、乗客ともどもに余裕があり和気あいあいとして居るのが良い。

釣り人の意識も樽一杯釣るとか、多獲を目的としてなくて、せいぜい家族の分が釣れば良しという雰囲気だ。日本は全般的にどうしても匹数を多く釣ってしまう傾向にある。

日真名氏は海外での釣りでは米国、ノルウェイ、オーストラリア、ニュージーランド、香港、パキスタン、インドネシア、を経験し楽しんできた。それぞれの国で変化があり面白い。各国に釣り事情については別の機会に譲りたいと思う。

総括；

釣り人の立場から遊漁を考える題を頂いて、釣り人自身の反省も含めて、上記でいろいろ述べさせて頂いた。一方遊漁と職漁の関係については識者に論じていただく事で本稿では触れていない。果たして現代の遊漁事情から見て支払いに見合う楽しみや喜び、つまり“満足度”というものを得られているだろうかと自問して見る。

中には魚族保護（資源）よりも、出来るだけ多く釣らせよう、沢山のお土産を持たせようとしている船宿もある。それがなし得る最良のサービスと考えているふしがある。

今日趣味の多様化で各世代が色んな分野での楽しみ方を知っている。遊漁乗船料は支払う金額で比較すれば、陸上でのゴルフのプレイ費用と同程度と思える。共に自然が相手の過酷な商売である。ゴルフ場の経営の大変さ、困難さは広く世の中に知られていて、色んな工夫がされている。

比較の問題だが一般的に言って遊漁（船宿）よりゴルフ場の方が客へのサービスの提供の点で努力しているように思える。ほんの例を挙げれば、季節割引やウィークデイ割引、レディースデイやシニアデーを設けたり、飲み物、昼食無料サービス、冠コンペによる賞品多数等々でお客を楽しませたり、トータルで料金を抑えて女性をはじめ各年齢層の来場を促している。冷暖房や個別ロッカーから素晴らしい風呂まで付いている。

あるゴルフ場の秋の競技会は“全米オープン”と銘を打って、その当日のコンペの賞品の全てに土地の特産米10kgとか、5kgを提供して参加者に喜ばれて居る。

一方船宿の方は、鉄道便に合わせての無料送迎サービスや、沖上がり後の昼食サービスがあるところもある。インターネット割引や乗船回数割引等のサービスを行っているが地域や船宿でまだまだ差がある。出来れば将来インターネット予約が出来て、船宿到着時には支払いも完了していて、釣り座も決まり、清潔で気持ちの良い釣りが出来ることを願う。

要は客商売の感覚の更なる醸成が遊漁の今日に求められていると思う。

船頭の指示も明確で、なんとか釣り客を楽しく遊ばせてやろうという姿勢が見られ、釣座の間隔も適当で、お祭りもなく、その上天候に恵まれれば、何も“ツ”(10匹以上の釣果)が抜けなくても満足して家路に着く事が出来るのである。

今日は良い釣りであった、楽しく遊べたと釣り人は思いたいのである。

上記の文中にはやや一方的な表現もあり、読まれた方々には反論も数々あるかと思いますが、立場上どうしても記述せねばならないこともありました。非礼の程をどうかお許しを乞う次第です。今後にいささかでも資すれば有り難いと思います。

船釣り初心者指導奮戦記

小林賢吾

JOFI事業活動の一環として、これまで若洲臨海公園での家族釣り教室、シニア釣り教室、また奥多摩でのマス釣り大会などで、釣り初心者の指導を経験してきましたが、指導の難しさを感じることはあまりありませんでした。

ところが船釣り初心者の指導を3回にわたって行ったところ、改めて初心者への釣り指導の難しさを体験させられました。

一人は25才の今風ギャル、もう一人は65才の元気なオバサマ。二人とも竿を持つのも、船に乗るのも初めてという全くの初心者です。先ず25才の方ですが、穏やかな海で道具も軽めの方が良いと考え、東京湾のキス釣りを選びました。

出船前の時間を利用して、停泊中の船の上で基本動作の練習をしました。竿の持ち方、リールの使い方など、仕掛けの投入から底立ちを取り、仕掛けを回収するまでの一連の動きを実演して見せた後、竿を手渡して真似してもらいました。

ところが、先ず竿の持ち方がおかしい。竿尻を握ってしまうのです。どうやら釣竿というのは竿尻を持つものという先入観があるみたいで(これは65才のオバサマも同じでした)、正しい見本を見てもらっても竿尻に手が行ってしまうらしい。実演する際に、竿はリールの近くを持ち竿尻は脇の下に抱えるようにと言うべきでした。

何度か一連の基本動作を繰り返すうちにリールの巻き方や底立ちの取り方を含め、一応できるよう

になりました。出船前の期本動作のレクチュアはとても有効だと感じました。

いざ釣り場に到着して最初の仕事として、クーラーボックスへ海水を入れることを推奨しています。これも黙って水を汲んで、と言うと例外なくクーラー杯に水を入れようとします。氷が解けると水が増えるので3cm位で良いよと言うべきでした。

最初は付ききりで面倒を見たのですが、第一投から仕掛けが絡んでしまいました。仕掛けの上に錘を落としたためです。仕掛けを振り込むように指導し、以後は投入時の絡みはなくなりました。

幸いなことに二投目でキスの当たりがありました。でもびっくりして手首で竿をあおったため、見事なすっぽ抜け。合わせるには手首でなしに腕全体を持ち上げるように実演してみせた筈ですが、当たりを感じると本能的にびっくり合わせをしてしまうのでしょうか。

有難いことに三投目でキスが釣れました。20cm足らずのキスでしたが、引きの強さは思いのほかだったらしく、興奮して取り込みの際にリールを巻き過ぎたため、竿の先の方にキスがぶら下がっていてほとんど鯉のぼり状態でした。

初めてリールを使うと大抵の場合仕掛けの回収の際にもリールを巻きすぎるきらいがあるようです。そこで、先糸が竿先に入ったところまで巻いて竿を立てれば仕掛けが丁度手元に来ることを練習のときに体験して貰っている筈なのですが、魚が掛かると興奮して忘れてしまうようです。

生まれて初めて自分で釣った魚の感触に大喜び。パールピンクに輝く魚体に感激したところまでは良いのですが、魚を手で掴めない、針を外せない。最初の記念すべき一匹は仕方なしに私が針の外し方を実演してみせましたが、二匹目からは自分でやるように厳しく言いました。ただし、タオルハンカチを渡してエラ蓋の辺りをしっかり押さえるよう指導しました。個人的には魚を掴むのにハンカチを使うと、針が布に刺さったりするので嫌いです。でも、ご婦人方にはお薦めかもしれません。

最初はぎこちなかった動作も2時間もするうちに大分スムーズに動けるようになり、沖上がりの頃には結構一人前になりました。やはり習うより慣れろでしょうか。船の前方に動きに全く無駄の無いベテラン釣り師が居ましたので、暇な時間帯にワザを盗んで真似してみても言ったのも良かったのかも知れません。

終わってみれば中型のキスが21尾。

初めてにしては上出来でした。ただし、この釣りで最後まで青イソメの餌づけが出来なかったのは最大の失敗でした。帰ってからインストラクター仲間に話したところ、「アンタはインストラクターの資格が無いよ。」とけなされました。若い女の子にとって、活きた青イソメにさわるのはどうしても出来ないそうで、余り強制すると釣りが嫌になってしまうし、難しいところです。

次はオバサンも一緒にアジ釣りにトライしましたが、本格的なビシアジ釣りは電動リールで錘も120号と重たい道具立てになりますので、浅場のライトタックルアジを選びました。

途中でやや潮が速くなったときは流石に底立ちが取りづらく、糸を出し過ぎてオマツリしたこともありました。錘が着底した感触は初心者にはかなり難しいようで何度も練習してもらいました。そのためにコマセの打ちなおしの際は都度底まで錘を落とすように指導しましたが、これが底立ち取りの良い練習になった模様です。

初心者の二人に共通してみられたことですが、魚を掛けてからの巻き上げの際に竿先が下がってしまいます。恐らくは竿が重くて腕が疲れるためでしょうが、竿の弾力を使えなくなりますので、脇の下にしっかり挟み、一方の手を竿の前の方を持つようにして竿をなるべく水平に保つよう指導しました。生徒さんたちが真面目に釣りに専念した成果か、二人とも十分お土産を確保し、帰りの車の中では大はしゃぎでした。

3回目は25才の方だけで本格的なビシアジを狙いましたが、電動リールにもじきに慣れ、アジとは思えないほどの強い引き込みも体感出来て満足してもらえました。

3回の釣り指導を通じて、一番強く感じたのは、言葉で説明することの難しさ、特に専門用語を使って初心者を混乱させないようにすることの難しさだったと思います。

「当たりがあったら軽く利き合わせてね。」などといってしまうのですが、初心者にとっては、「当たりって何?」、「利き合わせて何?」、ということになります。底立ち、タナ取り、こませ、しゃくり、当たり、合わせ、・・・・。これらはどれも初心者にとっては生まれて初めて耳にする言葉な訳で、これにドラッグや竿尻などの釣り道具の名前、

トモ、ミヨシなどの船の部位の名前も加わるので、混乱するばかり。

インストラクターにとって一番大切なことは、専門知識を知っていることよりも専門用語を使わずに初心者理解してもらおうノウハウではないかと思つた程です。

インストラクターとしてもとても勉強になった3回の釣行でしたが、僅か二人とは言え女性船釣りファンを増やすことが出来たのが一番の成果だったと思います。



2012年3月11日の総会で、当会のブルゾン作成について紹介しました。撥水、防湿機能付き、左袖上部に漢字で名前が入ります。

2012年度活動実績

日付	活動実績
03/11 (日)	平成24年度定期総会開催
03/23～25 (金・土・日)	2012 国際フィッシングショウへの参加 ニジマス釣り等のサポート
03/31 (土)	ヤマメ発眼卵埋設籠回収
05/05 (祝)	北区子供釣り教室への参加 釣り指導サポート
05/27 (日)	親子マス釣り懇親会 マス釣り & BBQ
06/03 (日)	隅田川へ子供たちが稚魚放流への参加 稚魚放流サポート
06/10 (日)	第26回鋸南町白ギス釣り大会への参加
07/14 (土)	若洲海浜公園親子釣り教室準備会への参加
07/29 (日)	第7回若洲海浜公園親子釣り教室への参加 釣り指導サポート
07/29 (日)	北区家族ハゼ釣り大会への参加 釣り指導サポート
08/19 (日)	全磯連関東支部主催女性・少年少女釣り大会への参加 釣り指導サポート
09/04 (火)	東京湾遊漁船業共同組合、日本釣振興会東京支部共催カサゴ稚魚放流への参加 大森一中1年生体験の手伝い
09/09 (日)	JOFI 東京懇親釣り会
09/29 (土)	若洲海浜公園シニア釣り教室準備会への参加
09/29～30 (土・日)	24年度全釣り協公認釣りインストラクター資格講習・試験 スタッフ・講師を派遣
10/08 (祝)	若洲海浜公園第7回シニア釣り

	教室への参加 釣り指導サポート
10/14 (日)	ふるさと清掃運動会実行委員会主催 ふるさと清掃運動会 in 荒川に協力参加、及び荒川に生息している魚類の展示など
10/21 (日)	「水辺感謝の日」清掃デーへの参加
11/04 (日)	みんなで遊ぼうフィッシング祭りへの参加 釣り指導サポート

JOFI 東京汐留会（勉強会）を発足

港区在住の阿部敏明環境部長のお骨折りで、浜松町にあるエコプラザに於いて毎月第二土曜日午後会員同士による勉強会を開始いたしました。環境問題、釣法技術、魚種、生態系、釣り具、魚介料理、釣りの歴史などとても興味のある題材にして皆で意見交換を致します。

特に釣り道には武士道とも共通・類似する点多く有しておりとても奥が深い故（和竿、魚拓、四季の釣法、体力の鍛錬、釣り場の開拓）いろいろと論じられるかと思えます。資格修得した皆さん、ワンランク上の知識を共に学びませんか！

参加は自由です。どうぞご都合のつく日にお出かけください。

お宝コーナー



釣りが生活の一部となっています(鈴木 伸一)。



19世紀末頃に作られた英国 Army & Navy 製のビクトリア調グリーンハート竿 (8'6" Greenheart Trout Rod)に、シルクライン (Silk Fly Line)を巻き込んだやはり同年代の Army & Navy 製プラス・フライ・リールのセット。

たまには、こんな古の釣り具も使っています(鈴木 伸一)。

編集後記

今回は初めての試みということもあって、特にテーマも決めず原稿を集めました。正直言って予定通り原稿が集まるか心配もしていましたが、皆様のご協力を得て創刊号に相応しい内容の寄稿をいただき深く感謝しております。

今回は偶然にも会員の方々の子供のころの釣りの様子を数件お寄せいただき、懐かしさを感じると共に、釣り場の環境が大きく変化してきたことに将来の不安を感じずにはられません。我々釣りインストラクターは釣りの指導ができることのみならず、今後は環境問題や自然保全などにも目を向けていかねばならないのではないのでしょうか？

また、JOFI 東京としての新規事業の取り組み、釣りにおける諸々の問題点や制度、釣り指導上の問題点なども会員間で共有することができたのではないのでしょうか？

本会報誌は皆様からの寄稿の様子を見て適宜特集を組んで発行していきたいと思っております。原稿は随時募集しておりますので、会員名簿を参照し広報部宛にEメール、又は郵送でお寄せください。勿論、集まり具合によっては期限を切って募集することもありますので、その時はどうぞよろしくお願いいたします。(N. S.)

東京都釣りインストラクター連絡機構会報誌 第1号

発行日 平成25年3月3日

発行 JOFI 東京

(社)全日本釣り団体協議会 公認

東京都釣りインストラクター連絡機構

編集 同上 (広報部)

URL <http://www.jofi-tokyo.org/>